

どんなに時間がかかっても 元気な宮城をつくろう！

7月7日、「第2回 食のみやぎ復興ネットワーク総会」が宮城県仙台市で開催され、会に参加している194団体から農・水・畜産業の事業者や製造加工業者、みやぎ生協の組合員ら約240人が集まりました。

食のみやぎ復興ネットワークは、「喪失した生産基盤の復活・再生」、「みやぎの新しい特産品づくり」、「みやぎの食材を活用した商品づくり・みやぎの食産業を励ます商品づくり」を目標に掲げ、さまざまなプロジェクトの立ち上げや、一次・二次産業者の連携を活かした加工品開発などに取り組んできました（詳細は、本誌16号参照）。

7月7日に行なわれた総会では、「2012年度の活動」として、「地域復興のための商品づくり、商品普及の取り組みをさらに進める」、「ネットワーク参加団体の活動の“見える化”を進める」、「『買い支える活動』の拡大を進める」の3項目が提示されました。

東北国分（株）代表取締役社長の降幡進さんから、「どんなに時間がかか



総会の会場には、約240人が集まりました。

ろうとも、本日お集まりの方々が心をひとつに、元気な宮城、元気な一次産業をつくるんだという強い思いを結集していくことが、復興に向けての大きな力になると思っています」とあいさつがありました。

◆「農家として本当に感謝しています」 ～村田の秘伝豆プロジェクト

「村田の秘伝豆プロジェクト」は、食のみやぎ復興ネットワークが進めるプロジェクトのひとつで、「地域農業の活性化」「休耕圃場の復活」「後継者が安心して農業に取り組めるための経済的支援」を目指して、2011年から取り組みが始まりました。秘伝豆とは、東北地方に伝わる青豆です。現在、生産者の集まりである「村田出荷組合」の10軒の農家と食品メーカー、市場関係者、みやぎ生協が一緒になってプロジェクトを進めています。5月19日、快晴の空のもと、柴田郡村田町菅生の畑で「秘伝豆」の種まきが行なわれました。



9月の収穫を思い描きながら種を植える参加者。



秘伝豆の種を2粒ずつまいていく。種は、鳥対策の為に赤い。

種のまき方を指導してくれた高橋 保さんは、「生協さんと、もっと早くこういう取り組みができていたら、農業に対する意識も変わっていたと思う。そういう意味で、今回の取り組みは農家として本当に感謝しているという声が、この間の会合で会員から出たんだ」と顔をほころばせます。

仙台市場の松印松浦青果の大宮賢治さんも、「最近、秘伝豆をつくる若い人が増えました。それが光です」と手応えを感じています。秘伝豆プロジェクトで生産農家の状況は確実に変わりつつあります。

（日本生協連復興支援ポータルサイトより）